

2008年12月3日

～ 荒廃した地を“あをあを”とした森林に ～  
インドネシア共和国プロモ・トゥングル・スメル国立公園における  
植林プロジェクトを開始

住友林業株式会社（社長：矢野 龍 本社：東京都千代田区丸の内、以下 住友林業）は、CSR活動の一環として、インドネシア共和国・東ジャワ州プロモ・トゥングル・スメル国立公園にて同国林業省と協力し、同公園内の荒廃地約1,000haを対象とする新たな植林プロジェクトを2008年11月から最長20年間を期間として実施することとなりましたので、お知らせします

なお、本植林プロジェクトは現在、世界的に1件しか事例のない植林CDM事業の国連認定取得を視野に入れた取り組みとなります。

[植林プロジェクトの概要]

今回の植林プロジェクト実施地である東ジャワ州プロモ・トゥングル・スメル国立公園は、古くからこの地区に住むテングル人がヒンドゥー教の聖地として崇めてきたプロモ山を中心に、標高1,700m～2,500mという高地に広がるインドネシア林業省自然保護総局が管轄する国立公園であり、同国内有数の観光メッカです。しかし、現在の姿は度重なる森林火災などで森林の荒廃が進み、大部分が草原化。過去、幾度となく森林再生に向けた植林がされてきたものの、活火山であるプロモ山が噴出する亜硫酸ガスや、森林火災の再発などの影響から改善が難しい状況となっています。

住友林業はインドネシア共和国の東カリマンタン州スプル地区で1990年から13年を費やし、焼き畑や伐採跡地をもとの生態系に近い状態に戻す「熱帯林再生プロジェクト」を実施。終了した2004年3月には、東京ドーム107個分に相当する累積植栽面積503ha、累積植栽本数738,000本に及ぶ森林を再生した実績を有しています。

また、住友林業の創業は1691年、住友家の愛媛県別子銅山開口以降の山林事業部に端を發しますが、銅山事業の発展に伴い、森林の乱伐、亜硫酸ガスなどの煙害により銅山周辺の森林環境は悪化、荒廃しました。それを憂いた当時の別子銅山支配人で、後の住友二代目総理事となった伊庭貞剛が「このまま別子の山を荒蕪するにまかしておくことは、天地の大道に背くのである。どうにかして濫伐のあとを償ひ、別子全山を“あをあを”とした姿にして、之を大自然にかへさねばならない」と大造林計画を樹立、最大年間100万本を越す植林を続けたことで、今では“あをあを”とした森林へと復元した遺伝子を受け継いでいます。

この度、住友林業はこの活火山帯という困難な地で、同国林業省と協力し、これまでの植林実績や様々な技術を応用しながら、同公園内の荒廃地約1,000haを対象とする新たな植林プロジェクトを2008年11月から20年間を期間として挑戦します。

狙いとして、環境側面ではCO2吸収促進、土砂流出防止、水源涵養、生物多様性保全を高め、社会的側面では、雇用機会の創出とエコツーリズム観光資源価値の向上による地域の持続的な経済発展に寄与出来るよう、荒廃した草原を森林へと復元していきたいと考えています。

なお、本植林プロジェクトは困難とされる、植林CDM (Clean Development Mechanism)事業として、国連への申請もおこなう予定であり、来年の認定取得もあわせて目指してまいります。

[参考資料へ](#)

以上

《お問合せ先》

住友林業株式会社

コーポレート・コミュニケーション室 佐野

TEL：03-3214-2270

FAX：03-3214-2272